

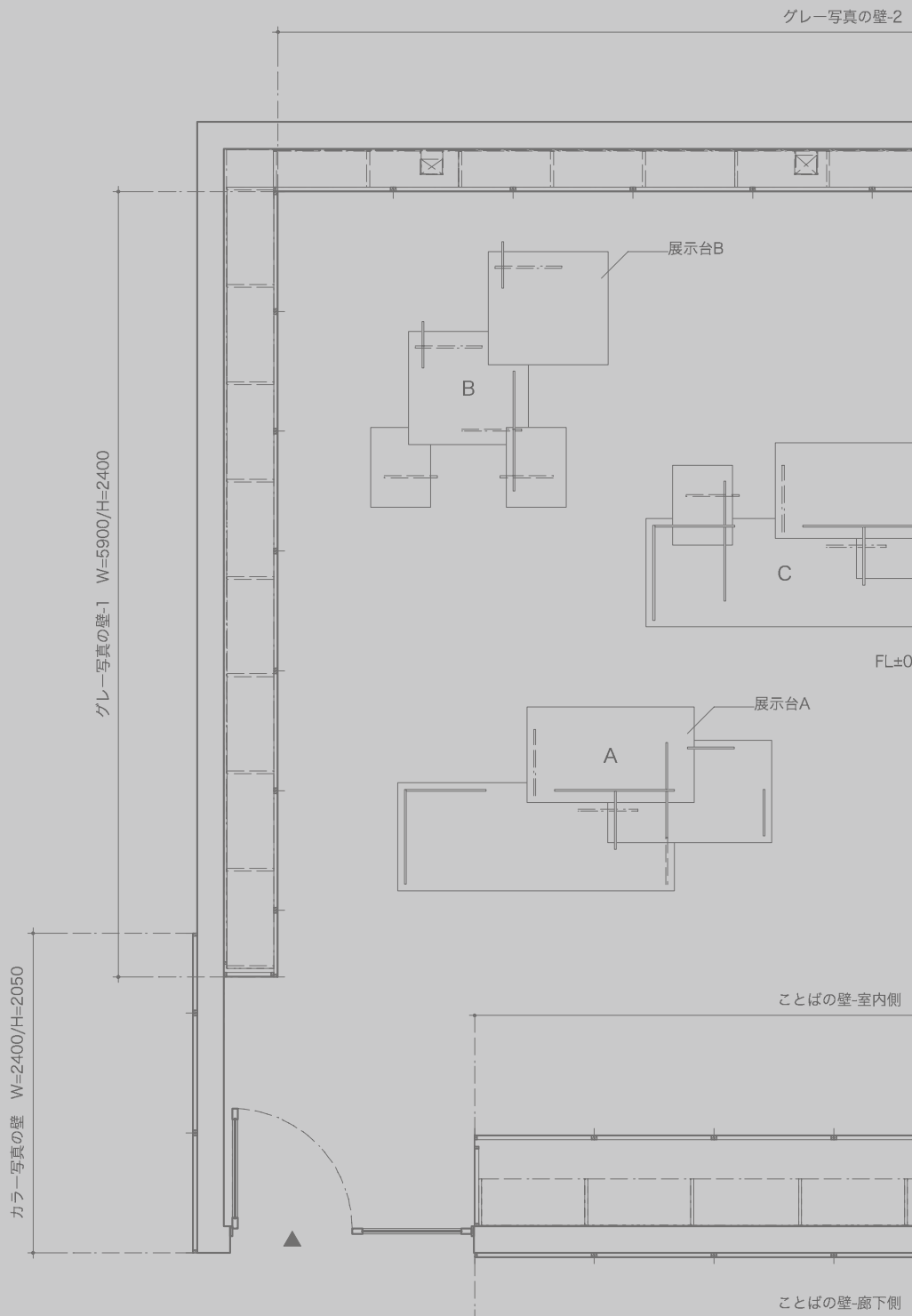
10年を伝えるための101日

「東京アートポイント計画 ことばと本の展覧会」ドキュメントレポート

大内伸輔

101

D
A
Y



10年を伝えるための101日

2019年3月2日～18日、3331 Arts Chiyodaの一室で「東京アートポイント計画 ことばと本の展覧会」を開催した。会場には200冊の本が並び、来場者は自由に手にとり読むことができる。それぞれの本に収められているのは、2009年から都内各地で実施されてきたアートプロジェクトの軌跡だ。壁面には記録写真や、本から抜き出されたフレーズが大きく掲示され、その思考と実践を物語っている。17日間の会期中に約1,700人が来場した。

本展は、都内47団体と38件のプロジェクトを実施してきた「東京アートポイント計画」事業の10周年企画であった。公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京に所属する専門スタッフ「プログラムオフィサー」が、共催パートナーであるNPOと東京都の間に立ち、まちなかに文化創造拠点（アートポイント）を生み出していく事業である。

10年間の試行錯誤をどのように表現すれば伝わるのだろうか。本書は、展覧会企画が立ち上がった日の記述からはじまる。日頃は中間支援職として働き、表舞台には立つことのないプログラムオフィサーが、ある日突然取り組むことになった展覧会づくり。制作期間はわずか2ヶ月。

何を展示すればいいのか、誰とつくればいいのか。どのように見せるべきか。迷いながらも進む制作の記録と、実際の展示風景を紹介しながら、伝えること、時間をかけること、立ち上げることのリアリティを残そうと試みた。10年間を伝えるための101日間の記録である。

アーツカウンシル東京
東京アートポイント計画 プログラムオフィサー
大内伸輔



2018年12月。アーツカウンシル東京・東京アートポイント計画チームでは、事業10周年に向けた書籍づくり **1** が進行していた。完成目標は3月初頭。私は担当分の原稿を書き終え、はっとしていた頃だった。あとは、3月初頭のプロモーションイベント「Open Room」の企画を決めるだけ。

その企画会議の席で事件は起きた。東京アートポイント計画 ディレクターの森司 **2** から出たアイデアが予想外のものだったのだ。

「10周年の展覧会をやろう」

展覧会。東京アートポイント計画の現場では、選択される頻度の低いフォーマットだ。ましてや、中間支援職である私たちは直接手がけることのないものだ。

「いいですね。たしかに、10周年ですしね。そうか展覧会。んー」

ことばを返すつもりが、自分を納得させるための独り言がつつらつと漏れていた。飲みこみ終えて、はたと気づく。

「誰がやれますかね？」

チームの面々を見渡してみる。うすうす気づいていながら。

「君しかないだろ」 **3**

間髪入れずにディレクター。うーん、ですね。

書籍づくりは、佳境。
動けそうな同僚、皆無。
展覧会をつくった経験、なし。
オープンまでの時間、約2ヶ月。
年度末。

（でもやるんだよ）

プログラムオフィサー歴10年。ひさびさの難問に、少しわくわくしていた。

1 事業10周年に向けた書籍づくり
書籍『これからの文化を「10年単位」で語るために ―東京アートポイント計画 2009-2018―』（通称「10年本」）づくりが進行していた。

2 ディレクターの森司
正式には、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課課長の森司。独自の先見性に基づいた無茶振りが多いことで有名。2008年まで20年間、水戸芸術館現代美術センターでキュレーターを務めてきたので、展覧会づくりのエキスパートでもある。その上司に「展覧会」を任されるのは相当なプレッシャーだ。

3 「君しかないだろ」
東京アートポイント計画の最古参スタッフであり、チームを束ねるチーフ（係長）であり、チームの落ち穂拾いをするのは常に筆者の役割。

展覧会をつくるには、専門家が必要だ。真っ先に声をかけたのは、鈴木事務所の代表であり建築家の鈴木雄介さん **4** だ。鈴木さんは展覧会における会場構成・展示施工のプロフェッショナルである。

森の無茶振りから3日後、初回の打ち合わせで驚いた。鈴木さんはさっそく模型を用意していたのだ。

何を展示するにせよ、壁がいる。展示台がいる。模型があることで、空間の「スペック」が明確になり、「どう見せていくのか」という対話からはじめることができた。

私たちが10年間でつくってきたもの、展覧会の展示品となるものは何か。

10年間で47団体と38のアートプロジェクトを実施してきた。本、DVD、記録写真。各アートプロジェクトで映像もずいぶん撮っているのでは。年間100プログラムやっているなら1000種類のチラシがあるのでは。アート作品もありそうだ。

本だけでも150冊はつくっているはずだ。毎年、東京アートポイント計画と関連事業 **5** で15冊ほどの本を発行しているからだ。10年間、つくらなかった年はない。本を媒介に対話が生まれるような空間がいいかもしれない。

本だ。「本が全部見られる」を展示の中心にしよう。

そうと決まれば、本のリスト化と分類からはじめよう。他にも展覧会制作にはいろいろな専門家の仲間が必要なはず。だが、まだ要件は見えてこない。

「よいお年を」と、挨拶を交わし、ミーティングを終えた。展覧会オープンは3月2日 **6**。年が明けたらもう残り50日。そんな馬鹿な。落ち着かない気持ちのまま、年末に突入した。

4 鈴木雄介さん

1983年生まれ。建築家。「川俣正・東京インプログレス」(2010-2013年度)や「ひののんフィクション」(2009-2011年度)など、東京アートポイント計画のアートプロジェクトで一緒にきた。

5 関連事業

人材育成事業「Tokyo Art Research Lab」、東日本大震災の被災地支援事業「Art Support Tohoku-Tokyo」。

6 オープンは3月2日

オープン日だけは確定していた。酷である。そして、この時点では10年本の完成予定日でもあった。この時点では。

D A Y **15** | 2018. 12.25 200冊の本だけで伝わる？

これまでに事業で発行してきた本のリスト化を進めたところ **7**、ちょうど「200冊」ということがわかった。10年の200冊。わかりやすくていい。

しかし、鈴木事務所へ送るための本を箱詰めしながら疑問が頭をよぎる。

「はて、これらの本を並べれば“正解”だろうか」

本に加えてその他の関連制作物を並べる。「東京アートポイント計画の10年」はそれで伝わるだろうか。物量しかない。何か足りないかないか。

ぐるぐるした頭で人の少ない年末のオフィスをうろうろしていると、配架してある印刷物に目が留まった。それは「Words Binder 2017 / Box+Letter」 **8**。その年の事業でつくった本から抜き出されたフレーズが並んでいる。

そうだ。強度を持った「ことば」が必要だ。10年分の本からことばを抜き出して、壁一面に展示してはどうか？

7 これまでに発行してきた本のリスト化を進めたところ

え？ データまとまってなかったの？ と思われるだろうか。……その通りである。分類や制作物にヌケモレがあり、10年本をつくるタイミングでようやく完璧なリストになった。まとめの機会としても周年行事は使える。

8 「Words Binder 2017 / Box+Letter」

毎年、関係者に向けて本を送る際に添付する「お手紙」。A3サイズの紙面一面を、その年の新刊から抜き出した「東京アートポイント計画が大切にしていることば」で埋め尽くしている。



D A Y 39 | 2019.1.18 次の仲間はデザイナー

鈴木事務所との2回目のミーティング。鈴木さんは7種の展示台の模型と全体図面を、私はことばを展示するアイデアと「Words Binder」を持ち寄った。

縮小コピーしたことばの一覧を模型に張り込むとイメージが湧く、臨場感が出る。展示空間の中心は、やはりことばだ。

そしてことばや写真を見せるには、展示空間のグラフィックデザインも重要だ。アイデアの発端である「Words Binder」のデザイナー、川村格夫さん **■9** をお願いすることにした。

年も明けたし、腰を据えてのリスタート。オープンまであと43日。

■9 川村格夫さん

1979年生まれ。デザイナー。「アートアクセスあだち 音まち千住の緑」(2011年度-)をはじめ、東京アートポイント計画のアートプロジェクトに関わるデザインを多数手がけている。お願いの電話をかけたら、「いいですよ。2月前半は海外に行ってるけど、作業はできる」と即答。2月前半は佳境だろうに。いないのにやってくれるのか。

D A Y 43 | 2019.1.22 要素はことばと本と写真

鈴木さん、川村さんも含めたミーティング。ふたりとも同じプロジェクトに関わったことはあったが、これまで接点はなかった。

しかし、どちらも展示のプロフェッショナル **■10**。集まってさっそく、技術的な視点から「伝えるべきこと」の優先順位が整理されていく。この時点で、チラシや映像展示のプランはやめ、ことばと本と写真に展示要素を絞った。

続いて写真の展示方法についてあれこれディスカッションを重ねる。各事業をタイムラインにして、たとえば1年1事業3枚ずつ貼り出してはどうか。年間15事業とすると、10年で450枚。……そんなに？

写真に関する案出しは続くものの、この時点では決まらなかった。とりあえず写真をピックアップしてみよう。1月24日までにサンプルとなる画像を渡すことに。やるしかない。

そして、重要なのは展示用のことばの選定だ。200冊の本から、象徴的なフレーズを抜粋する。10年200冊の本。何万字？ 何十万字？ いや、もっとだ。自分でやる……のか？

「ことばの展示プランはわかった。で、誰が選定するの？」

ディレクターの森に状況報告し、「自分で」と答えたらすぐさま返された。

「無理だろ」 **■11**

あと39日。

■10 どちらも展示のプロフェッショナル

美術業界では、展示空間の会場構成／施工を専門とする建築家や、展覧会のサイン／キャプション制作を得意とするデザイナーが活躍している。鈴木さんも川村さんも、そういった経験が豊か。頼もしい仲間だ。

■11 「無理だろ」

展覧会企画と並行して、10年本制作も佳境で、通常業務ですら山積み。上司に言われるまでもなく無理であった。それに自慢じゃないが筆者は遅読だ。大量のことばを相手にしたらまず間違いなくフリーズする。いずれにせよ無理であった。

D A Y 44 | 2019.1.23 最後の仲間はコミュニケーションプランナー

うすうす感づいてはいたが、ことばの選定は元同僚、中田一會さん **■12** の出番だ。かつて東京アートポイント計画の発信事業を共に立ち上げた、広報のプロフェッショナルだ。現在はフリーランスのコミュニケーションプランナーとして活躍している。

連絡をすると特急ワークに驚かれつつも、「東京アートポイント計画の10年に関われるのは嬉しい」と良い返事をいただき、さっそく作戦会議をすることとなった。

10年の200冊からことばを抜き出す。いい感じに。

「いい感じ」にするにはことばを選ぶ基準が必要だ。それこそが、物量の上に頼らない10年のメッセージとなる。中田さんとディスカッションしたのはその選び方からだった。

「東京アートポイント計画における『アート』とは何か」 **■13**

テーマはすぐに決まった。同僚時代から東京アートポイント計画の考え方を伝える難しさにも直面してきた。今回はそろそろ答えを示すいい機会なのかもしれない。

いわゆる「地域アート」の例に上がる、「地域でアートプロジェクトを展開することで、みんなが笑顔になりました」的なシーンは、一面でしかない。

アートプロジェクトで人々の日常に揺さぶりをかける。小さなことから社会を変えていく。それは綺麗事だけではすまない。

現場に宿る「アート性」を示すことができるのは、アーティストやNPOなどの実践者たちが紡いだ血の通ったことばだ。

200冊からテーマに沿ったフレーズを抽出できそうな本にあたりをつけ、この日は解散。

鈴木さん、川村さん、中田さん。3人ともこれまで共に何かをつくってきた間柄の仲間がそろった。人選と信頼感を含めて過不足なし。年末の不安は、ようやくとポジティブなものに転換された。

この座組なら、できそう。それでも、オープンまであと38日。

12 中田一会さん
1984年生まれ。コミュニケーションプランナー。東京アートポイント計画のプログラムオフィサー兼コミュニケーション・デザイン担当として勤務（2015-2017年度）したのち、独立。200冊の本にも親しんでいて、事業の内容にも詳しい。

13 「東京アートポイント計画における「アート」とはなにか」
聞かれるたびに頭を抱える質問のひとつ。プロセスを重視するアートプロジェクトにおいては、「これ」と一言では言いきれず、10年間ずっと悩んできた。

D A Y 51 | 2019.1.30 写真の立ち位置

「活動を伝えるために必要な写真は何かを考えたいですね」

展示用のサンプル写真を川村さんに渡した。10年本のためにピックアップしてあった見栄えの良い写真を20点ほど送付したところ、返信メールにこんなことばが添えられていた。

どう配置するにせよ写真で埋めるべき壁の長さは全長23.175m。会場となる「ROOM302」**14**の内壁、3面分だ。

川村さんの一言を契機に、どんな写真であるべきか対話がはじまった。

「作品」を見せればいいわけではない。アートプロジェクトは作品に至るプロセスやその後を大切にしてきた。しかしプロセスの写真は、インパクトが弱い**15**。かといってイベント当日の記録写真を集めると「たくさんの人がわさわさしている」シーンばかりになってしまう。

ヒキ／ヨリ、こども／おとな、作品あり／なし、賑やか／静か、それらの塩梅。時系列で追うことができつつ、ことばと本を補完する役割としての「伝わる」写真の見せ方とは。塩梅を探るスタディがはじまった。

来月は28日までしかない**16**。そんなことに気づいてもいたずらに焦るだけ。ぐっと飲みこんだ。

オープンまで、あと31日。

14 ROOM302
アーツカウンシル東京のレクチャールーム＋アーカイブセンター。東京都千代田区の元中学校をリノベーションして開設されたアートセンター「3331 Arts Chiyoda」の3階にあり、もともとは音楽室だった。

15 プロセスの写真はインパクトが弱い
アートプロジェクトはプロセスが大事といっても、写真で見ると「会議をしている」「メモをとっている」といった地味なイメージになりがちである。「伝わる」プロセスの残し方はアートプロジェクトにおける課題のひとつ。

16 来月は28日までしかない
公共事業は年度末が忙しい。毎年2月の短さに絶望するのは筆者だけではないはずだ。ちなみにピークは、決算と新年度の立ち上げが重なる3～4月。「ゴールデンウィークにならないと3月が終わらない」というのが、毎年内輪で飛び交う冗談だ。



D A Y 53 | 2019. 2.1 10年本の進行がやばい

2月になってしまった。展覧会も大変だが、10年本制作が予断を許さない状況になっていた。もともと展覧会に合わせて3月初旬に発行する予定が、どんでん返し連続 **17** で、3月中にどうにか納品が間に合えば……という状況になってきた。

そんな中、プロモーションイベント「Open Room」の企画運営もチームで手分けして進めねばならない。オフィスは台風の様相だったが、私は展覧会作業のためROOM302へ向かった。「企画として連動するはずだった本が間に合わないということは……展覧会にも影響がありそうだ」と、不安な気持ちになりながら。

本当は、チーフという立場上 **18**、すべてのプロジェクトの進行を見て、スタッフのフォローアップをしなければならない。わかってはいるけれども、ひとりで担当している展覧会は他に誰もフォローアップできない、自分案件なのだ。わかってはいたけれども、すべてを見渡すことができないでいた。

17 どんでん返し連続

いろいろな場面でどんでん返しは起こるものだが、このときは、主にディレクター・森のちゃぶ台返しにチームが翻弄されていた。森は展覧会づくりの20年選手であるとともに、カタログや本づくりの経験も厚い。なかなかスタッフだけでは太刀打ちできず……大変であった。

18 チーフという立場上

うっかり展覧会担当の気分になっていたが、筆者はチームにおいてはチーフプログラムオフィサーであり、係長である。本来は中間管理職だ。その自分が企画を担当するということは、相当切羽詰まった状況であったということでもある。

D A Y 57 | 2019. 2.5 ディレクターからの中間試験

オープンまで1ヶ月を切ったところで大まかな展示プランが完成。模型の世界ではもうできあがって見える。アウトラインまでは漕ぎ着けたので、あとはディテールの設計だ。

と、いうところまでをディレクターの森に進捗報告。

「ふむ、次の打ち合わせは？」

「明日です」

「じゃあ顔出すわ」

「！」

「明日は森も同行します」**19**とすぐさま鈴木さん、川村さんにメールした。現状確認だがひとかたの準備（主に心の）はしておかねば。チームに緊張が走った。

ちなみに、森からすれば、アウトラインができてからのディテールこそが質を高める力のかけどころ。このタイミングが手の入れ時だということがわかっていたのだ。あとから聞くところによると。

森は会議の席で、ひとつの問いを投げかけてきた。**20**

「壁に張り出す写真はカラーとモノクロ、どっちがいいと思う？」

模型を前に試験問題を出されたような気がして即答ができない。カラーの方が賑やかで会場全体が明るい気がする。だが、賑やかな展覧会にしたいのか。模型に本は置かれていないが本もカラフルだ。

私があれこれ考えているうちに他のメンバーの間では答えが出ていた。モノクロだ。正解というよりは、そちらの方がことばと本を見せるのに適している。

そう、展覧会を構成するのは「ことば・本・写真」の3要素だが、写真の立ち位置はことばと本を補完するものだ。一步下がっている方がことばと本が引き立つ。ひいては、写真も引き立つ。

「ことばと本の展覧会」、その名の通り。少し考えればわかることだ。もし2回目があるなら、その「少し」の時間を半減させたい。さらに10年後かもしれないけれど。オープンまで25日。

19 「明日は森も同行します」
このフレーズひとつで、付き合いの長い鈴木さん、川村さんには緊急度が伝わったはずだ。

20 問いを投げかけてきた
「あのプロジェクトには誰を配置するべきだと思う？」や、「この予算は変えられるんじゃないか？」など、よく森から試験問題を出される。ディレクター的には育成の一環である、らしい。

D
A
Y **59** | 2019.
2.7 10年のことばを絞る

一方、ことばの選定作業も進んでいた。中田さんが200冊から選び抜いたフレーズは、全部で95節に及んだ。事業ごとのバランスを見つつ、その強度に応じて選ばれたことばたち。長いもの、短いもの。それぞれプリントアウトし、短冊形に切って事業ごとに並べてみた。

展示できるのはせいぜい20節程度だ。じっくりと短冊を眺めながら優先順位を議論する。東京アートポイント計画における「アート」を語ることばはどれか。

小一時間ほど唸り候補が半分になったところで、森が様子を見に現れた。入室するなりテンポよく選びはじめる。

「ベースラインだけつくった。あとは任せる」

その数16節。選ぶ作業にももの15分とかからなかった。森はこの10年の「東京アートポイント計画における『アート』」がわかっている人物だ。最終確認は通すつもりだったが、ここでも1テンポ早くジャッジが入った。

16節を再度読み直してみる。「ベースライン」という表現に疑いはない。これがことばの展示の幹となる。が、なにか足りない。そこで敗者復活群を中田さんと選び、デザイナーの川村さんに送るデータを整えた。「ひとまず当て込んでもらい、過不足を教えてください」。不足であってほしい。もう少し加えたい。

その頃、施工チームは経師^{きょうじ}メディア出力と施工業者の選定と見積もりに入った模様。メールが飛び交っている。……経師ってなんだ？ **21** オープンまであと23日。

21 経師ってなんだ？
初めての展覧会制作。専門用語ひとつとってもわからないことが多かった。経師とは、襖や障子などを表具する職人や紙貼りの専門職のことらしい。「経師紙」のことも現場では単に「経師」と呼んでいるらしい。鈴木さんに電話して確認した。

アートプロジェクトを通じて、まずは人口の1パーセントでもいいから、単年度のなかで成果を求めるような、評価主義や効率主義みたいなものだけでは社会が死んでしまうという認識を持つ人が増えたらいいのですが。
『東京アートポイント計画が、アートプロジェクトを運営する「事務局」と話すべきことば。の本』p.57

関わりしろ

『東京アートポイント計画が、アートプロジェクトを運営する「事務局」と話すべきことば。の本(増補版)』p.64

お前が絵を描くなら、文章を書くなら、このまちの住人になるなよ。距離をとれ。

『東北の風景をきく FIELD RECORDING vol.02』p.44

このまちは結構ものを作ってきて、プロデュース、要するに製作はしたけれども、クリエイティブなかというところでもない。クリエイティブしたものを真似ることは上手という、いまだに昔の日本のかたちです。だからこそ、アーティストが発想したものを。

『もとアートプロジェクト—東京2009-2012ドキュメント』p.153

違う道を通ってみる
『ノック!—じぶんの地域ともう一度出会う10の扉—』p.34

自分の価値観が壊されるとか、見ていた世界がもうひとつバージョンアップするためには、気持ちのいいものだけを見せてもしょうがない。

『アートプロジェクトの悩み—現場のプロたちはいつも何に直面しているのか』p.93

外へ出たとき、劇場やイベント場で当たり前だと思っていた考え方や作り方が通用しないことに気づきました。新しいことをするには、作り方も新しくしないといけない。自分たちから作らないといけない。しかも積極的に「表現」をしないといけない。
『アートレウス家の建て方』p.154

こういうプロジェクトって、お互い暗黙知でやっているの、暗黙知で共有した景色で「何となくわかってるよね」って感じてやってることに、ちょっとした危機感がある。それをもう一歩深く行くためには、「表現」でありながら、見た景色に対して次はどうやってそれを明確に「言葉」にしているか。『「やってみる、たちどまる、そしてまたはじめる」小倉井アートフル・アクション! 2009-2017活動記録』p.165

思えば1年前、1枚の妄想絵から
『NICORABAN』p.1

変化を拒み、あたらしい挑戦から目を背ける
私たちの可能性は閉ざされる。『三宅島大学誌』p.99

つねに多数派と少数派、常識と非常識は入れ替わり、重層的かつ複層的な境界線を、自他ともに引き続けながら生活している「私たち」。人々の多様な生のあり方を、誰がどのような観点からまなざすかによって、境界線は揺れ動き、ずれを生み、つなぎ変わってゆく。『JOURNAL 東京芸術大学研究 1』p.11

一般的な美術に起きたこと」を鑑賞者といふ出すことだと。トプロジェクト起こそうとするて、集団的なてゆく営みで、もいいかもしれ

『TOKYO ART RESEARCH』

この「アート」は刻々と変化し続けるから、輪郭線では捉えられないが、だいたい同じ場所を旋回している。小鳥に近づくときのように、そっと、さりげなく、そばに寄ること。『ぐるぐるヤミプロジェクト 2010-2013』p.8

つくりかた研究所の行ってきた大きな活動のひとつは、端的に言えば、「問題にすらなりえないようなどうでもいい問題について「だらだらと考え続ける」ことである。『つくりかた研究所の問題集』p.211

大事に違いないけど、ずっと繰り返されてじゃあ、毎回、その喪失と向き合うためには、事前の予行演習が必要で、看取りの時間をみんながでゆく練習の機会、太古の昔もあつた。『ブランケット紀行 2014-2017』p.87

プロジェクトについて有効なフィードバックを情報を収集し、分析するシステムです。『評価のために—評価の(なぜ?)を徹底解明 評価ゼミレクチャーノート』p.8

『人々と重ねた月日』p.91

造は面倒くさい。元気がないというものは、ではないかな。『ART BRIDGE 2015』p.5

ここできいたことは、どこでも起こり得ることだし、もしかしたら、ここでも起こる。『日常の巡礼』p.4

「このイベントは
『「アートアクセスあだち 音まち千」』

3.11が

「だ。けど、夏

D A Y 64 | 2019. 2.12 アートを表す25節

「横書きだと経験的に左から読まれていくので、同心円的に中心に向かって希望の読み方の流れになるようにレイアウトしています」

川村さんからことばの壁のデザインラフが上がってきた。レイアウトは、イメージ通り。さっそく、森に確認。ここで、200冊の95節から絞り込んだ、25節が決まった。

あとはブラッシュアップだ。下地のチップボール紙 **22** に数ミリの空間をあけ、ことばをフレーズとして読ませる工夫を施すこととなった。

これはいい展示になる気がしてきた。やっと、確信めいたものが掴めた。 **23**

それぞれの締め切りに抜きつ抜かれつ。たまに追いつかれてはダッシュで稼ぐ。オープンまであと18日。

22 チップボール紙

新聞紙などの古紙を原料につくられたグレーの積層紙。展覧会に合わせて発行されるはずだった10年本の表紙に合わせて会場構成にも使用したのだが……。

23 やっと、確信めいたものが掴めた

ここに来るまであまりにも不安だった。よかった。本当によかった。

D A Y 67 | 2019. 2.15 実寸大のスタディ

出勤すると川村さんからメールがきていた。今度は、廊下面のデザインラフが届いた。早い。忘れていたけど彼は今、ヨーロッパ周遊中だ。8,000km先から、廊下面の実寸の確認。

それは現場でやるのが一番とROOM302へ。オフィスにいななければいけないはずのチーフこと私は、この頃だいたい現場にいた。

廊下で実寸テストをしていると鈴木事務所チームが到着。鈴木さんとスタッフのレオさん **24** だ。展示台のサンプルを1台、組み立ててみた。これまで模型の中で縮小サイズとして続けてきたスタディはいよいよ実寸の段階に。

本を美しく見せるためのシートの色は、グレーがよさそうだ。ということは、ここも壁と同じくチップボール紙の出番。そして本を立てて展示する際にはストッパーが必要。黒いゴムバンド、白いPPバンド……実寸大のスタディのなかでより良い素材を決めていく。

オープンまであと15日。次は2月21日、施工開始だ。

24 レオさん

鈴木さんばかり話に出てきたが、鈴木事務所は、鈴木雄介さんとフランスから来たレオ・アレガーさんの二人組だ。200冊の本に合わせデザインされた展示台はレオさんの傑作だと思う。

D A Y 70 | 2019. 2.18 HDDの大海原を搜索！

ことばも決まり、施工のスペックも決まり、いったんやりきった気持ちの月曜日。

8,000km先から写真壁のデザインデータが到着した。モノクロの濃淡のパターンが提示される中、川村さんからオーダーが。

「もっと大きいサイズの画像はありますか？」

A2ほどのサイズに出力するには解像度の足りない写真が十数点ほどあるとのこと。時を同じくして、10年本制作でも事業写真の解像度が足りない問題が勃発中だった。

チームを上げての搜索開始。スタッフと手分けして10年分のすべての写真データが収められたHDDの大海原 **25** に飛び込むことに。タイムリミットは3日後、2月21日11時。同日15時には入稿だ。

まだまだやりきってなどいないのだ。オープンまであと12日、ではあるが。

25 HDDの大海原

東京アートポイント計画の記録写真はあまりにも量が多いので、アーツカウンシル東京のイントラネット上からは締め出され、オフィスにあるHDD（ハードディスク）に収めることになっていた。

なんとか大海原からは使える写真が救出された。配置のバランスも整え、無事入稿。

迎えた施工初日。この日から8日間の作業に入る。まずは壁づくりから。こうなってくると、私には「順調ですか?」の進捗確認と駐車場の確保くらいしか役割がない。

と、落ち着きそうになるものの、次のことを考えないと。今回は展示会場でありながら、イベント会場にもなる必要がある **26**。どの面をステージにするか、来場者の椅子は置くことができるのか。座った位置からステージは見えるのか。施工作業の合間に鈴木さんと相談してそれぞれ着地させていく。展示台の配置が確定してからでは修正はきかない。

到着したことばのカットニングシートを確認しながら、オープン後の動かし方を考えはじめた。ようやく、会期中のことを考えはじめることができた。

オープンまで、そう、あと8日。

26 展示会場でありながら、イベント会場にもなる必要がある
会期中は公募説明会や東京アートポイント計画の共催団体によるクロストークなど、17日間で8本のイベントを会場で実施した。

「いつものROOM302じゃないみたい」

オープン前チェックの日、「いつものROOM302」を知るスタッフたちは口々にそう言った。

それは光によるところが大きい。外の光は完全にシャットアウトし、蛍光灯もすべて撤去。新たに仮設したスポットライトの光のみで空間は整えられた。これは鈴木事務所の作戦通り。私自身もオープン前日に体感するまで、こんなに一変するとは想像が追いついていなかった。

ディレクター・森による最終チェック。展覧会はオープン前日でもまだまだ改善点がある。すなわち、伸びしろがある。鑑賞する人の動線は適切か、十分な鑑賞スペースが確保されているか。入口から入ったときの風景はどう見えるか。

7つの展示台はすべて、事業カテゴリーごとに区分された本の数と形によって設計されて

いる。各々の距離感、方向のベストポジションを探るため、ディレクター号令のもと鈴木さんとレオさんと私で何度も何度も押したり引いたり、くるくると回転させたりした。

ある程度の位置決めが見えてきたところで森は「受付で車椅子借りてきて」**27**と発した。

やや面食らいつつもその必要性はすぐに飲みこめた。適切な動線幅の最終チェック。初めて乗った車椅子を操り、会場を巡ってみた。ゆったり鑑賞するにはもう少し幅が必要だ。

展覧会を多くの人に見てもらいたい。完成が近づくにつれ、その感覚は比例して大きくなる。そのためには、誰しも妨げてはならない。

車椅子が快適な空間なら、ベビーカーも立ち回れるはずだ。自分たちがつくったものが危険物になってはならない。こどもの目線からはどうか。展示台の角は危ないか。金具などの突起物は残っていないか。オープン後を想定してチェックを重ねに重ねた。

今回の制作チームの、あるいは東京アートポイント計画を共につくっている同僚たちの、これまで関わってきた人たちの想いが乗っている。そんな気持ちになった。チェックもおのずと入念になる。

こうして「居やすい空間」はつくられていく。

27 「受付で車椅子借りてきて」
筆者はこのとき初めて利用したが、千代田区の施設である 3331 Arts Chiyoda では受付で車椅子が借りられる。

本を置く。その最後の仕事は「分類し、場所を決めた大内さんがやるもの」と、鈴木さんから言われていた。なので、完成を待っていた。オープン前夜の 22 時。あと 12 時間だ。

しかし、設営作業は到底終電までに終わりそうもない。はて……大丈夫なのか。

ばちばち深夜の空気が入り込んできた部屋に「バキン!……バキン!」と大きな作業音が。慌てて廊下に出ると **28**、鈴木さんが 1 枚の板を持ってきた。展示台に仮置きしていた 1 冊の本の下に置く。

「本は手にとって見てもらいますよね。この板は戻す場所のガイドです」

今回の本の展示は「お手にとってご覧ください」方式だ。外見のビジュアルとしてだけでなく、中身のことばにも出会ってほしい。ということは、本が行方不明になる可能性も、違う場所に置かれて分類が乱れてしまう可能性もある。

情報を最小限にするため通し番号をつけるだけにとどめた。そこで発案されたのがガイドとなる板だ。200冊はそれぞれ判型が異なる。そのことも活かし、手にとった鑑賞者はおのずと同じ形の場所に戻す。人の行動に無意識に作用する設計の工夫。このあたりがあらためて鈴木事務所の力だと思った。詰めの技は最後の最後に登場した。なんとも心憎い演出……。

が、タイムアップ。設営作業は夜通しとなることが決定した。完成は見届けたいが自分がいてもやることはなさそうだ。

翌朝早めに来ることにして、23時57分、バキン!の音を背に駆け足で駅へ急ぐ。はて……大丈夫なのか。大丈夫、だよな。不安を打ち消すように深夜に大きな声を出してその場をあとにした。

「あととはよろしくお願いします!」

オープンまであと、10時間。

28 慌てて廊下に出ると

かつてROOM302の改修中、騒音でお叱りを受けたことがある。今回もクレームになるんじゃないかと慌てたが、幸い同じフロアの方たちはすでに帰っていた模様。ほっとした……。



7 時間後の午前 7 時、会場へと戻ってきた。ついに完成だ。できているはずだ。はやる気持ちを抑えきれずに小走りで向かう、ROOM302。近づくとは作業音が聞こえる。……もしや。

「おはようございます!」

鈴木さんのテンションは高かった。設営作業は続いていた。

「大丈夫ですか? (=終わりそうですか?)」

「大丈夫です!」

鈴木さんのテンションは高かった。信じるしかない。そうして 8 時には清掃作業に、9 時には最終調整に。静けさに包まれたオープン前の会場で、粗がないか一緒に見直し、整えた。

なんとかまとまった。オープンまであと 15 分。昨夜応援で緊急招集された施工スタッフが本を手にとって読んでいる。ああ、お客さんはこんなふうにこの展覧会を体感するんだ。その佇まいはイメージ通りだった。思わずカメラのシャッターを切った。

10 時。3331 Arts Chiyoda の開館時間も 10 時。とても静かな「オープン」を迎えた。1 時間ほどゆっくりと、噛みしめることができた。

11 時。最初の来場者は、ベビーカーを押したファミリーだった **29**。不都合はなさそう。その後もコンスタントに来場者がやってきた。人の少ない時間に、間に合っていなかった本の配布フローづくりや、引き継ぎノートづくり、バックヤードの整頓など **30** を後追いで進めた。重厚になりがちな空気を緩和するために、浮力のある音楽を流すことにした。とにかく、無事に展覧会は開いた。心地よい疲れ。

会期終了まであと 16 日。

29 最初の来場者は、ベビーカーを押したファミリーだった
前日の車椅子での動線テストを思い出し、心震えた。テストしておいてよかった……! たくさんの人に見てもらえると安心した瞬間だった。

30 本の配布フローづくりや～
当日までフローができてなかったとはお恥ずかしい限りだが、おかげで会期中 322 冊が人の手に渡ることになる。

展覧会会期中、イベント時はことばの壁を背にステージエリアを確保することとなった。

そうすると展示台の合間からステージを見ることができ、30 名が着席できる。登壇者は 10 年のことばを背負って語ることに。その力を、最初のイベント「東京アートポイント計画 公募説明会」**31** で知ることとなる。

前兆はあった。開場 30 分前、入口に列ができていた。アートプロジェクトの共催パートナーを募る公募事業をはじめて 4 年。こんなことは一度もなかった。展示室は 30 名の来場者で埋め尽くされた。前回開催した際の実に 6 倍もの参加者だ **32**。

説明会では、私自身がことばを紹介しながら「東京アートポイント計画とは何か」についてお話した。10 年のことばの力を得て、発話に熱が入っていた。来場者の目と耳が、自身に向かって集中していることが見て取れた。質問にも熱がこもる。終了後も質問の列ができる。ことばの壁が、時間と空間に熱気をもたらした、かもしれない。

その後、東京アートポイント計画の共催団体がテーマ別に対談するクロストークを 5 回開催。「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」ディレクターの吉田武司さんもプロジェクトから生まれたことば「このイベントはいったい誰のためにやるんですか」を前に気づきや悩みを語った。東京アートポイント計画を体現することばがさらに肉声で語られる、これまでのどの報告会よりも届く、伝わる空間の力があった。

「Open Room」はもともと、東京アートポイント計画のショーケースとしてスタートしたイベントだ。展示会場は、アートプロジェクトの実感を伝えるのに最適な空間となっていた。

毎回ここできたらいいのに。

31 「東京アートポイント計画 公募説明会」
東京アートポイント計画では、共催パートナーとなる NPO を公募形式で募集している。

32 前回開催した際の実に 6 倍もの参加者だ
つまり前回の説明会参加者数は 5 名。フォローすると、そのときは雪にみまわれて天候も良くなかったから……だと思われる。

D A Y 90 | 2019. 3.10 200冊が見つないでくれる

会期中に「アートプロジェクト相談窓口」を実施した。プログラムオフィサーがアートプロジェクトにおける悩みの相談相手となり、公募への誘導もはかるイベント。会場の隅に椅子とテーブルをしつらえて対話のできる空間をつくった。ふとした思いつきでイベント終了後も撤収せず、そのままにしておいたところ、おのずと休憩所として機能しはじめた。

ある人は本を手にとって、腰掛けて読みふける。別の2人組は向き合って座り、それぞれの本を話題におしゃべりをしている。計画時に断念した風景がふいに立ち上がった。そうでした。この展覧会は「ことばと本を見せる」で終わってはならない。それらを契機に対話と交流が生まれる空間にもなり得るはずだ。

そのことに気づいてからはわざわざ「相談窓口」を掲げなくとも、ふらりとやってきた来場者と対話する時間を持つようになった。アートプロジェクトに興味がある人、関わっている人なら何かしら疑問や悩みがあるはず。記録に困っている人にはアーカイブ関連の本を。思考力を身に着けたい人にはTokyo Art Research Labの講義録を。なんといっても200冊。200通りの提案をすることができた。

本を媒介として人と情報をつなぐことができる。つなぐことでいつか何かが生まれるかもしれない。ここはプログラムオフィサーの重要な役割のひとつ「情報集配」³³を具現化したような場所だ。

毎日ここに居られればいいのに。

33 「情報集配」

読んで字のごとく、情報を集め、配ること。中間支援職として、重要だと思われる事柄を調査し、精査し、支援対象に情報として渡すことは仕事のひとつ。

D A Y 98 | 2019. 3.18 再会の機会

展覧会では、さまざまな再会の機会に恵まれた。

同時期に開かれた3331 Arts Chiyodaのアートフェアでは、専門家がお気に入りの作品を選ぶ「コレクター・プライズ」が開催されていた。プライズを授ける権利を持っていたNPO法人インビジブルの林曉甫^{あきお}さんは、「ことばと本の展覧会」を選んでくれた。アートフェア事務局では想定外のプライズ対象³⁴にもんどり打っていたそうだが、かつて

アートプロジェクトを共催したNPOメンバー³⁵が共感して選んでくれたことはなんとも嬉しい出来事だった。

10年本を共につくった編集者の川村庸子さんは本のガイドとなる板の心遣いに感嘆していた。鈴木事務所のこだわりへの評価が自分ごととして感じられる。

2009年度にアーティストとして関わっていた美術家の西尾美也さんも来訪。プロジェクトを本として残してきたこと、一つ一つのデザイン性の高さ、使い勝手の良さ、展示空間の空気感。ことばを発するたびにそれぞれ評価して下さった。現在は大学でアートプロジェクトについての教鞭を執る西尾さんに活用していただくべく、後日、本の詰め合わせを送ることを約束した。

東京アートポイント計画の10周年の展覧会。その節目に、多くの再会が訪れた。見るもの、会える人の場があることはその機会をもたらす。そして、未来へのアクションへとつながる対話がある。まだまだ再会したい人がいる。

1年ぐらい撤去しなくていいのに。

34 想定外のプライズ対象

3331アートフェアのプライズ対象は本来、アーティストやギャラリーが出品したアート作品である。連携企画とはいえ、まさか「ことばと本の展覧会」が選ばれるとは。

35 かつてアートプロジェクトを共催したNPOメンバー

NPO法人インビジブルとは、東京都六本木エリアを中心に「リライトプロジェクト」(2015-2017年度)を共催した。

アートプロジェクトを持続可能なものにするには。そんな問いに 10 年向き合ってきた。

日頃は舞台裏から支える立場だが、今回の展覧会は私自身が直接担当したひとつのプロジェクトであった。「続けばいいのに」と、思う。しかしながらプロジェクトは、終わる。

会期終了1週間前には鈴木さんと具体的な撤収の段取りを相談し、撤去の日程の駐車場の予約をとった。設営にまるまる8日かかった本展も、撤去はものの3日ばかり。3月18日の時間延長開場を終え、19日には撤収作業がはじまった。

まずは、本をすべて箱に戻す。本たちは帰って行った。あらためてじっくりと、本の展示されていない、プレーンな展示台を眺める。組み合わせの複雑さ、機能性、デザイン性。クオリティの高さを確認しつつも、主人のいない台からは終わってしまった感がほとばしっていた。実感せざるをえない。

壊す様子を見たくなかったからか、単に年度末で時間がなかったからか、その後の撤収作業には立ち会わず、完了確認の日となった。

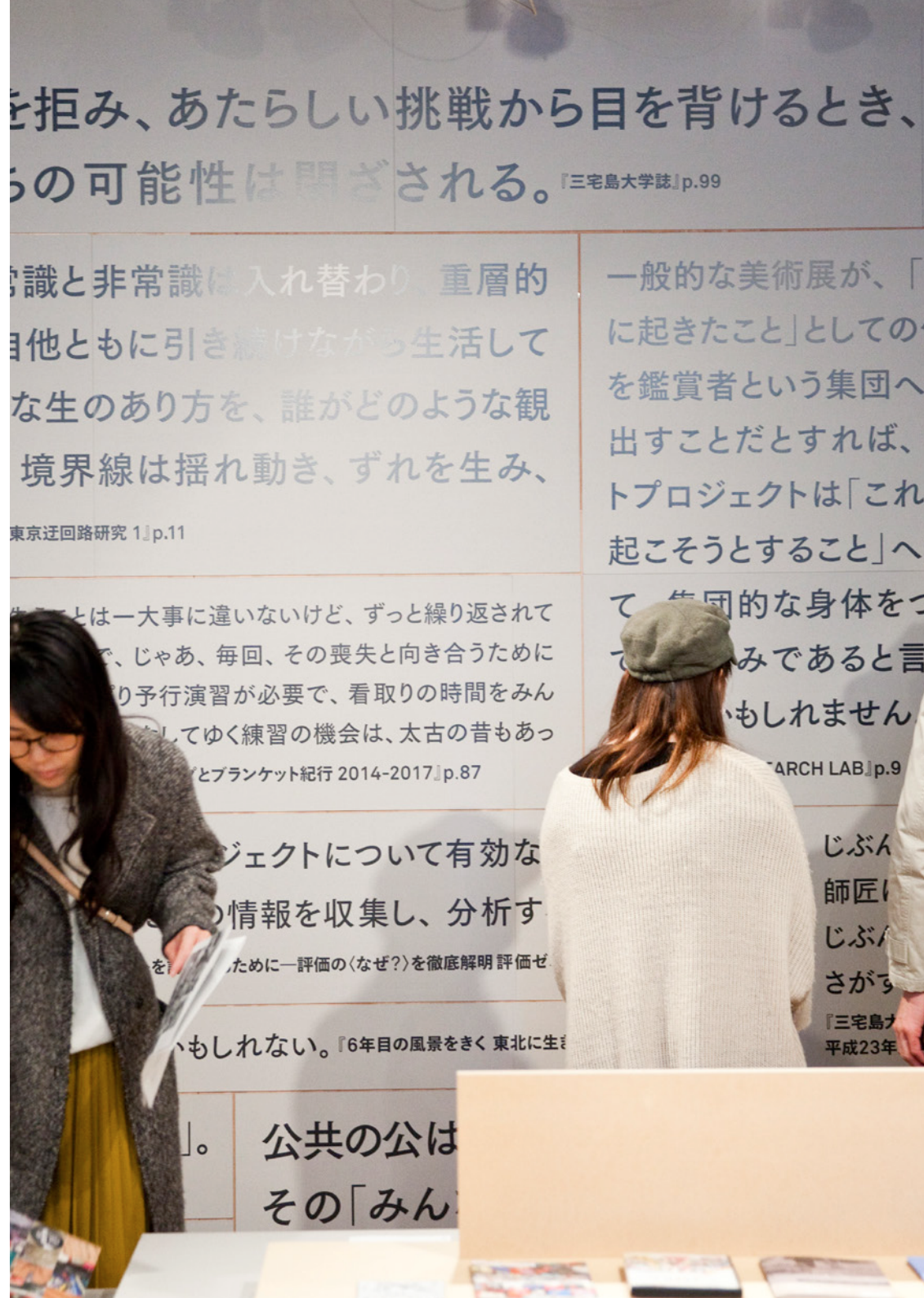
ROOM302は日の光と、蛍光灯で照らされる部屋へと戻った。何事もなかったかのように。

ひとつだけ、「1年ぐらい撤去しなくていい」を選択したものがある。10年をたどる廊下のことばの展示だ。会期半ばに、2019年を10周年イヤーとしてさまざまな企画を打つ(だろう)と思いつき残すことに決めた。これには関係者一同、賛同してくれた。

3月21日、101日間のプロジェクト「東京アートポイント計画 ことばと本の展覧会」は終了した。

1週間後の3月29日、10年本『これからの文化を「10年単位」で語るために ―東京アートポイント計画 2009-2018―』の第1刷が発行。東京アートポイント計画を伝えるためのバトン は 201冊目となる第2走者へと渡された。

プロジェクトを残すことにことさら注力してきた東京アートポイント計画。そのとき、どのように思い、何が起こり、何へとつながったか。より、試みを強固なものにするために、伝わることばをつくるために、返し縫いのような営みをこれからも飽くことなく続けていく。





[illegible]

© 2010

「やがてなら、ああ、こういうことかもしれないし、
だんだんわかってきて、それが一体何なのか、
価値化していく必要があるなと思いました」

2011

...と出会うかが重要になった

2013

「環境能力が身につくと、それに応じてとばの数を増す。そのとばは、環境でのふるまいに余裕を与えてくれる。プログラムオフィサーの仕事は何かと考えたときに、このようにとばを増やせばいいという結論に至った」

2012

「アートプロジェクトの現場は人間の面が多いですが、事業で起るとすると、個人の責任はわけて考えるようになりました。個人としての働きと別に、組織には「仕組み」としての機能と責任があるからこそ、リスクマネジメントする必要もあるのだと」

2011

1. 日本は、世界最大の経済大国であるが、資源が乏しく、食糧の多くを輸入に依存している。このため、海外からの資源と食糧の確保が重要な課題となっている。

2014

2014

6月8日は、東京でイベント「フューチャーズ」の発表会に出席。
会場は、東京の有名なビルに隣接した豪華なホテル。その二階席のような位置があった。
そのために、これまで以上に「感謝状」を書く。第二回大会のように賞品がなかった。
それでもいい。これまで以上にやりきったことに満足している。
フューチャーズの成功を喜ぶ。『未来と経済社会の未来』の序文を書いた。

「時代や社会の流れからそろそろこう言われるだろうな」と予測して、
準備しておくのが我々の仕事のひとつです。
そうすると、本当に必要なタイミングがやってくる」

2015

2015

東京文化発信プロジェクト室が、アーツカウンシル東京と統合した。

東京アート・イベント計画で行っていた事業はすべて停てったが、組織改編により、芸術活動や事業体制など、あらゆることをリニューアルすることになる。

事業計画そのものを改めて審議化、体系化した。

「アーツカウンシルって何ですか？」

2016

2016

事業部の組織図を簡単に「伝言」がスタート、それによって、外側とのコミュニケーションの必要性が高まり、チーム内にもコミュニケーションチャネルの確保を取り入れることになる。

関係性を保ち、一つひとつの事柄をいかに整理し続けた。

「伝える」仕事はつい外側に目が向きがちですが、
実際は活動の内側を整えたり、深く潜っていくことです。
現場のエピソードを拾い、関係性に手を入れ、
外の声と内の意見を丁寧に織っていくことを大事にしていました。

10年後を視野に入れた活動指針

2018

2018
前年度から続く中間会議での議論を踏まえて、東京アートポイント計画の活動指針を改めて定めた。
次の10年をどのようにしていったらいいのだろう。
Tokyo Art Research Labとの運動性を高め、2020年以降に事業を行っていく準備を整えていく。
「ハブ」のようなハブになるには、

『「インターカウンスル」のようなハブになるには、』

東京には小さなアートプロジェクトが必要だ

2019

4回目の公募キャッチコピーは「大きな東京には、小さなアートプロジェクトが必要だ」。
10周年記念イベント「東京アートポイント計画の10年とこれから 2009年→2019年」を開催。

ことばと本の展覧会や、トークセッションやディスカッションを通し、次の10年、次の東京における文化の生態系に思いを巡らす。

「植物も、人間も、実をつけ、
収穫するにはかけるべき時間がある。
だからこそ現在だけでなく、来たるべき時代を予見するような
豊かな思考と実践を必要とする。
いま、わたしたちに必要なのは、社会と深くかかわりながら
『10年単位の時間』で文化を育もうとする、
覚悟と技術なのではないだろうか。」

これからの文化を「10年単位」で語るために
—東京アートポイント計画—

文化を織りなしていく営み

「展覧会をやろう」を「無茶振り」として受け止めたならば、「展覧会のメイキング本（記録本）をつくろう」と言い放った私のことばも、同じように本書の著者・大内伸輔には聞こえたことだろう。

しかし、読み進めていくと、意外や意外、展覧会制作も本書の執筆も、なかなか楽しい時間だったようだ。葛藤を抱えつつもことばの端々から、その「わくわく感」が伺い知れる。苦労に見合う達成感も味わったようだ。そのことが嬉しい。

そもそもは、2年越しの準備で進めてきた書籍『これからの文化を「10年単位」で語るために ―東京アートポイント計画 2009-2018―』（以下、「10年本」と記す）の編纂作業が進行していたからこそ、実現できたのが「東京アートポイント計画 ことばと本の展覧会」（以下、「10年展」と記す）だ。

「書籍」や「展覧会」というメディアに活動の軌跡を落とし込んだ理由ははっきりとある。10年の活動を俯瞰し、その輪郭を捉え直し、整理し、可視化する。成し得たこと（成果）とこれからすべき取り組み（課題、方向性）を明示し、共有する。この振る舞いは、自分たちの活動を価値化することである。同時にそれは、「自己点検」、「自己検証」という柔らかな状況下から、活動の意義を問い、問われる審判の目に身（事業）を晒すことでもある。この果敢な挑戦こそが、次の10年を担うために必要なものを気づかせてくれる。その意味で、東京アートポイント計画には「10年本」も「10年展」も必要であった。

本書において101日間の取り組みの軌跡は、東京アートポイント計画の最古参メンバーであり、チーフである大内の目線からの手記で表した。それゆえに当事者としての想いを携え、仲間とやりとりし、クリエイションに伴うピリッとした空気の機微までが垣間見える記録集になっている。

東京アートポイント計画で実施している各アートプロジェクトは、そのような当事者意識を持つ者たちが担う事業だ。その10年の取り組みを紹介する展覧会を、普段は裏方を務めるプログラムオフィサーが、みずからの手仕事として取り組んだ意味は大きい。

10年という時間の積み重ねは、各プロジェクトの成果だけではなく、人や知見のネットワークを含めた生態系的な環境の醸成をもたらした。だから「10年本」には、最終的に『これからの文化を「10年単位」で語るために』と名付けたのだ。

本書『10年を伝えるための101日』（通称「101本」となりそう）は、展覧会のメイキングノートではあるが、合わせて「10年本」の存在を伝える重要な仕事を担う。

東京アートポイント計画では、事業5年目に通称「ことば本」（『東京アートポイント計画がアートプロジェクトを運営する「事務局」と話すときのことば。の本』）を発行した。そして10年目に「10年本」を世に送り出すことができた。その編纂時の胎動に近いものが「10年展」であり、その生みの親の手記が「101本」だ。

綿々と続く「行為と記録」の入れ子の関係こそが、文化を織りなしていく営みの姿だ。身体的温度と強度のある「ことば」を獲得し続けるために、私たちはこれからも当事者としての取り組みを続けていこう。

スタッフへのお疲れ様に代えて。

アーツカウンシル東京
東京アートポイント計画 ディレクター
森 司



これからの文化を「10年単位」で語るために
— 東京アートポイント計画 2009-2018 —

発行 | 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
発行日 | 2019年3月29日
定価 | 2,800円(税別)
https://tarl.jp/library/output/2018/artpoint_2009-2018/

東京アートポイント計画 ことばと本の展覧会

会期 | 2019年3月2日(土) - 18日(月)
会場 | ROOM302(東京都千代田区外神田 6-11-14-302 [3331 Arts Chiyoda 3F])
主催 | 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
監修 | 森司(アーツカウンシル東京)
企画 | 大内伸輔(アーツカウンシル東京)
空間構成・展示施工 | 鈴木事務所
デザイン | 川村格夫
編集協力 | 中田一会(きてん企画室)

10年を伝えるための101日
「東京アートポイント計画 ことばと本の展覧会」ドキュメントレポート

2019年9月25日 発行

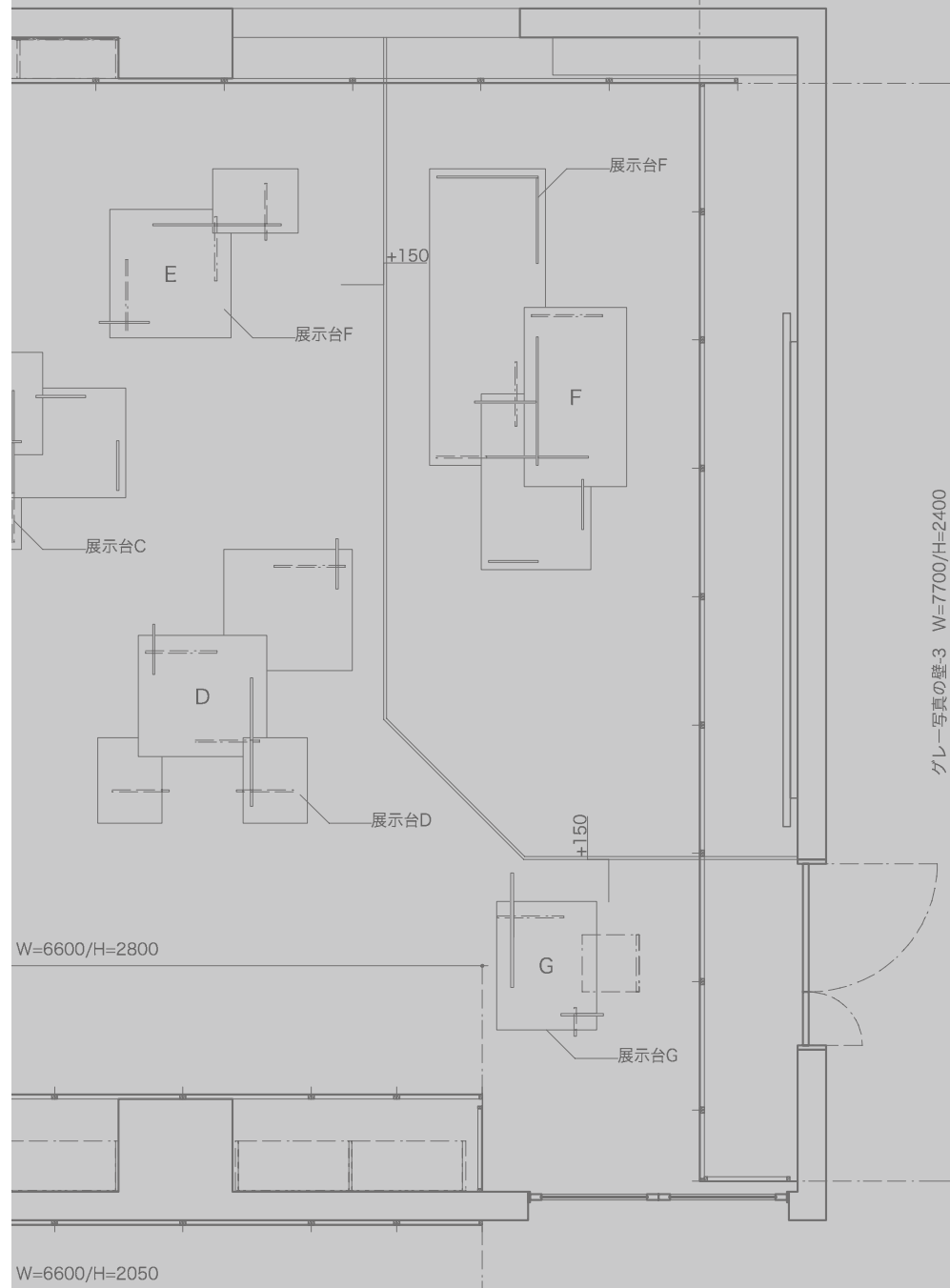
執筆 | 大内伸輔(アーツカウンシル東京)
編集・構成 | 中田一会(きてん企画室)
デザイン | 福岡泰隆
写真 | 高岡弘
監修 | 森司(アーツカウンシル東京)

発行 |
公益財団法人東京都歴史文化財団
アーツカウンシル東京
〒102-0073
東京都千代田区九段北 4丁目1-28
九段ファーストプレイス 8階
TEL 03-6256-8435
FAX 03-6256-8829
<https://www.artscouncil-tokyo.jp>

ISBN 978-4-909894-07-6 C0070

大内伸輔
1980年生まれ。公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課事業調整係長。2009年の立ち上げ時より「東京アートポイント計画」のプログラムオフィサーを務める。

W=9600/H=2400





文化でつながる。未来とつながる。

Tokyo.Tokyo
FESTIVAL

